



令和7年度 果樹情報 第15号

(令和7年10月20日)

福島県農林水産部農業振興課



1 気象概況 (10 月前半、果樹研究所)

平均気温は、第1半旬が19.3℃で平年より1.5℃高く、第2半旬が18.6℃で平年より2.4℃高く、第3半旬が16.0℃で平年より0.1℃高く経過しました。

この期間の降水量は69.0mmで平年比110.9%と平年並でした。日照時間は62.0時間で平年比81.2%と平年より少なくなりました。

2 土壌水分 (10 月 16 日現在、果樹研究所)

10 月 15 日時点の土壌水分 (pF 値: 果樹研究所なしほ場: 草生・無かん水) は、深さ 20cm で 2.0、深さ 40cm で 2.0、深さ 60cm で 2.2 となっており、適湿状態です (図 1)。

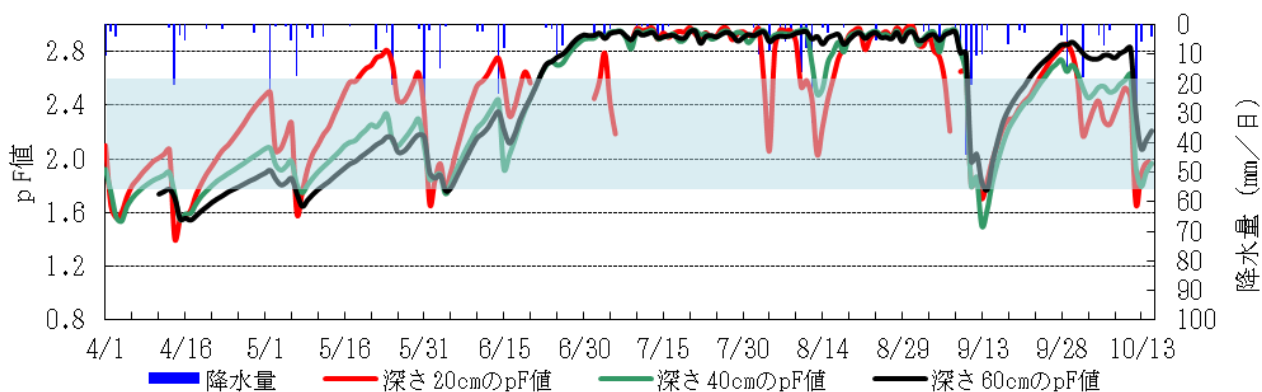


図1 土壌 pF 値の推移(果樹研究所なしほ場:草生・無かん水)

図中の網掛け部は、適湿の範囲(pF1.8~2.6)

3 発育状況 (10 月 16 日現在、果樹研究所)

(1) なし

ア 収穫状況

「ラ・フランス」の収穫盛期は10月2日で平年より2日早くなりました。果実重は370gで平年より大きく、収穫時の糖度は14.8° Brixで平年より高くなりました(表1)。

表1 ナシ主要品種の収穫期と果実品質

品 種	収穫開始日 (月/日)			収 穫 盛 期 (月/日)			収 穫 終 期 (月/日)			果 実 重 (g)			糖 度 (° Brix)		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
幸 水	8/18	8/24	8/13	8/23	8/29	8/18	8/28	9/ 4	8/22	353	382	403	13.1	12.5	13.0
豊 水	9/ 4	9/12	9/ 2	9/12	9/17	9/ 6	9/16	9/24	9/ 9	482	423	601	13.9	12.9	13.5
二十世紀	9/11	9/17	9/10	9/13	9/21	9/11	9/16	9/25	9/13	366	402	473	11.8	11.1	11.1
あきづき	9/17	9/25	9/11	9/26	9/28	9/16	9/29	10/3	9/20	528	462	482	13.5	13.0	13.3
ラ・フランス	10/2	10/4	9/30	10/2	10/4	9/30	10/2	10/7	9/30	370	294	390	14.8	12.9	14.2

注) 平年 1991~2020 年の平年値

(2) りんご

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「ふじ」は縦径が79.3mm(平年比97%)、横径が85.6mm(平年比96%)と平年並の状況です。満開後日数で比較すると、平年より小さくなっています。

イ 成熟状況

「ふじ」の満開後 168 日（10 月 9 日）における成熟調査の結果は、果実硬度が 15.5 ポンドと平年よりやや高く、デンプン指数が 3.3 と平年より低く（図 2、3）、糖度は 12.9° Brix で平年よりやや低く、リンゴ酸含量は 0.43mg/100ml で平年より高くなっています。果皮中クロロフィル含量は平年より高く、果皮中アントシアニン含量は平年よりかなり低い状況です（図 4、5）。

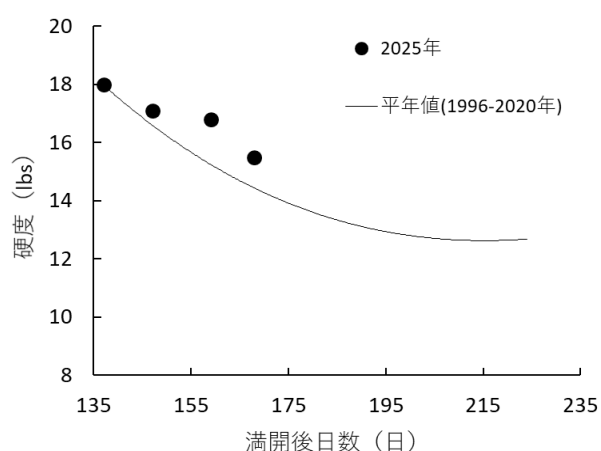


図 2 「ふじ」の果実硬度の推移

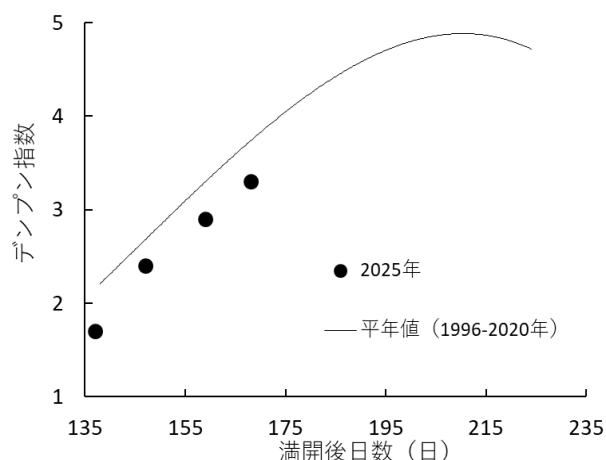


図 3 「ふじ」のデンプン指数の推移

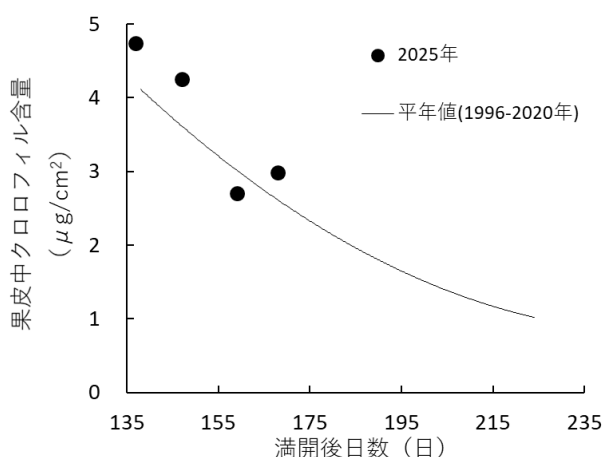


図 4 「ふじ」の果皮中クロロフィル含量の推移

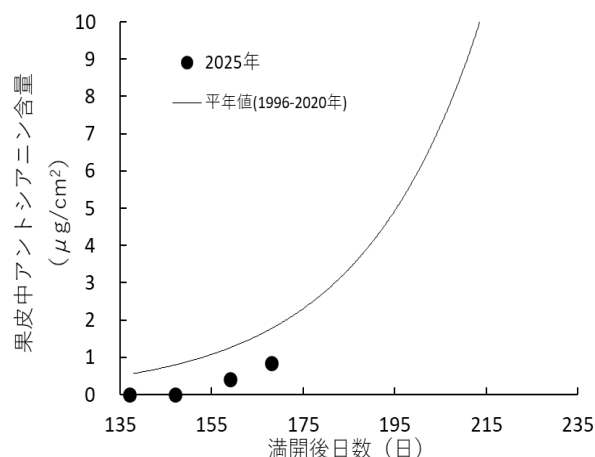


図 5 「ふじ」の果皮中アントシアニン含量の推移

ウ 「ふじ」の裂果発生状況

満開後 168 日（10 月 9 日）における「ふじ」／マルバ台果実の外部裂果率は 0 %で過去 3 年間と比較して少なく、内部裂果発生率は 23.3 %と過去 2 年間と比較して同等～多い傾向でした（表 2）。

表 2 りんご「ふじ」の裂果発生状況（満開後 170 日ころ）

調査樹	樹齢	外部裂果率 (%)				内部裂果発生率 (%)			
		2025	2024	2023	2022	2025	2024	2023	2022
ふじ/マルバ台	23	0	0	3.3	23.3	23.3	10.0	23.3	50.0

4 栽培上の留意点

(1) りんご

ア 「ふじ」の収穫前管理

樹冠内部が混み合うような場合には、反射シートに光が差す程度に徒長枝の間引きを行いましょう。

摘葉、玉回しは遅れないように計画的に実施しましょう。その際に、日焼け果等の傷害果は、

選果基準に従って適切に処理しましょう。

イ 「王林」の収穫

未熟果（緑色果）を収穫すると食味が劣るため、果面全体に果点が浮き上がってきた果実から2～3回に分けて収穫しましょう。収穫適期は、果皮色が全体に黄色味を帯び、がくあ部付近にやや緑色が残っている状態の時です。果面から緑色が消えた果実は貯蔵性が低くなるため、収穫が遅れないように注意しましょう。

ウ 「ふじ」の収穫

収穫に当たっては、蜜入りの状態に加えて、果実の着色、地色及び食味等により総合的に判断しましょう。

5 病害虫防除上の留意点

(1) 病害

ア モモせん孔細菌病

本病は秋期に降水量が多いと翌春に春型枝病斑の発生が多くなる傾向にあるため、収穫が終了した園では降雨前の秋期防除を徹底し、越冬病原菌密度の低下を図りましょう。

3回目の防除を実施していない場合には、薬剤は4-12式ボルドー液、又はICボルドー412を30倍で使用するか、クレフノンを100倍で加用してコサイド3000を2,000倍で、又はクレフノンを100倍で加用してムッシュボルドーDFを500倍で使用しましょう。

イ ナシ黒星病

秋期防除は、翌年の伝染源となるりん片への感染予防に重要です。重要な防除時期は、りん片生組織の露出（図6）が多くなる頃（果樹研究所では10月上旬～11月上旬）となります（図7）。

（参考：令和4年度普及に移しうる成果（<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/566356.pdf>））。薬剤散布は、オーソサイド水和剤80を600倍で使用し、2週間間隔で2～3回散布（キャプタンの総使用回数に注意）し、最終散布は落葉率80%頃を目安に実施します。また、薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、薬液が棚上まで十分量かかるよう丁寧に行いましょう。

なお、10月9日時点の果樹研究所「幸水」予備枝におけるりん片生組織の露出芽率は19.8%で、9月30日の12.0から増加しています。

薬剤散布前には徒長枝の整理等の新梢管理を行い、薬剤の散布むらをなくしましょう。2回目以降の散布では、薬剤のかかり具合を確認し、新梢管理を見直しましょう。



図6 露出した芽りん片生組織（杵内）

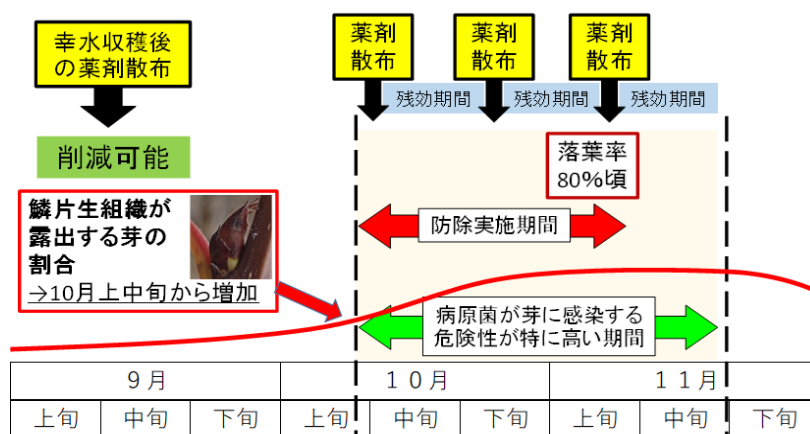


図7 なし及び病原菌の生態に基づく秋期防除の考え方

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 農業革新担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>